

『ジャン・クリストフ』第9巻「燃える茨」

— 音楽資料 —

2024年1月27日（土）午後2時—4時

みすず書房：全集第21巻「ありし日の音楽家たち」

ありし日の音楽家「モーツァルト」261頁

驚くべきことは、まさに、かれの芸術がいつも成功を目指しており、しかもそのために自分というものをけっして犠牲にしなかったということである。かれの音楽はつねに大衆に対する効果というものを念頭に置いて書かれている。しかもそれにもかかわらず、それはけっして見当はずれなことをしておらず、いわんとすることだけをちゃんとやってのけている。

この点においてモーツァルトは十分にそのこつ、その巧妙さ、その皮肉な精神を駆使している。かれは大衆を軽蔑しているが、自分自身をかぎりなく尊敬している。それゆえかれは自分で顔を赤らめるような譲歩は決してしない。かれは大衆をすかしすかしつれていく。かれは自分の聴衆に自分たちはかれのつ層を理解しているというように思いこましてしまうが、かれの作品にむけられる喝采はただまさに喝采されようがために作られた楽句に向けられるにすぎない。聴衆が理解しようがしまいがそんなことは問題ではない。彼らは喝采さえすればよいのうであり、また作品の成功によって作者はさらに新しい作品を做自由が得られさえすればよいのである。

「私のオペラのすでに出来上がっているものは異常な成功をいたるところで収めました。

それは私が自分の大衆というものを知っているからです。」1781年9月19日

モーツァルト(1756-1791)

「後宮よりの逃走」K384

- ・第一幕 Ouverture
- ・第三幕 アリア：どんな拷問が待っていようとも